国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	選定保存技術	手打針製作	てうちばりせいさく		広島市安佐南区伴東	平成30年（2018）9月25日 （選定・保持者認定）			手打針製作は，染織品の縫製や刺繍等に用いられる針を製作する技術である。 針は，衣装等の製作に用いられる様々な工芸技術を支える最も基本的な用具であり，古来，多種多様な形態の針が発達してきた。伝統的な手打針の製作工程には，原材料である針金の切削，針頭(かぶと)の成型，穿孔，焼き入れと焼きなまし，研磨等があり，それぞれに精密かつ高度な技術が必要とされる。 手打針は，多彩な工芸技術の内容と意匠表現に対応するように，太さ，長さ，針頭や針孔(めど)の形，先端の尖り等が細やかに調整されたもので，極めて多種にわたる。また，使用する糸の色艶を損ねず，速く正確に縫えるよう形状に工夫が重ねられ，機能性が高い。しかし，明治時代に欧米から新たな技術が導入され，それ以来，機械製の針が広く普及し，手打針の存在を凌駕するようになった。 今日においても良質の手打針は，日本刺繍のような伝統的な工芸技術や，染織品等の有形文化財の保存技術のために不可欠のものであるが，製作者が激減し，供給が危ぶまれている。 保持者の小島氏は，伝統的な手打針の製作技術を高度に体得しており，日本刺繍や有形文化財の修復等に用いられる様々な種類の手打針を製作し，その品質は関係者から高い評価を得ている。		
国	選定保存技術	手織中継表製作	ておりなかつぎおもてせいさく		福山市沼隈町下山南	令和5年（2023）10月18日 （選定・保持者認定）			中継表は畳表のひとつで、様々な文化財建造物の畳に使用されている。従来の畳表は１本の長い藺草で織った引通表が用いられていたが、近世には２本の藺草を両端から通して中間で繋ぐ中継表が考案された。これにより、短い藺草でも畳表の材料として使えるようになった。またこの技法では太さが均一な藺草の中間部分のみを使用することにより、良質な畳表の製織が可能となった。 手織中継表の製作は、(1)手織機に麻を結いだ縦糸を掛け、両端から藺草を通す、(2)藺草を通す度に機のコテが前後に傾き、縦糸が２本ごとに前後にずれることで交互に織る、(3)20回ほど藺草を通したら、コテで強く叩き締める、(4)これを繰り返すことで１枚の中継表を織り上げる、といった工程をたどる。皺や斑が出ないように一様に織ったり、材料となる藺草を選別したりするには熟練を要する。畳需要の減少や動力織機への移行などで、手織中継表の織手は数人を残すのみとなり、技術の保存の措置を講ずる必要がある。 保持者の来山淳平氏は、手織中継表製作に精通し、その卓越する技術は高い評価を得ている。また手織機の調整、製作や縦糸の製作など、周辺技術も熟知している。		